

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

中国小国史略考證第十二(續)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 1995-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2268

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中國小說史略考證 第十二(續)

中 島 長 文

7 灌園耐得翁述臨安盛事、以至以磨煉其技藝者矣

一一三

寫印本『大略』(接承も所引)云、孟元老東京夢華錄所舉爲講史、小說、說評話、說三分、說五代史等分科、無商謎。周密武林舊事所舉爲演史說經譚經小說說譚話四科、亦無商謎、且言小說有雄辯社、蓋汴都、說話已盛行、一般名人甚衆、且有集會矣。「說評話」の「評」は「譚」の誤。文中『東京夢華錄』、『武林舊事』に「商謎」はないとするのは、ともに見落して前者は既引(5)、後者は次に引く文に見られるように言及がある。鉛印本は「史略」と殆んど同じだが、『都城紀勝』の「日合生」の後に「無商謎」の一句が入る。『都城紀勝』のテキストは「商謎」があるので後それに氣附いて『史略』初版ではその句を削除した。また『武林舊事』の「無合生」の替りに「亦無商謎」という一句があるが、これも『都城紀勝』同様『史略』初版で正した。しかしこの訂正も不注意によるもので、『武林舊事』には「合笙」が記載されている。事實としてもこの記述は訂正されなければならない。なお『都城紀勝』の「說參請」の「請」字は鉛印本以後すべて脱して一九五七年版全集で補われた。

「宋民間之所謂小說及其後來」(接承も所引)云、但周密所記者又小異、爲演史、說經譚經、小說、說譚話、而無合生。唐中宗時、武平一上書言「比來妖伎胡人、街童市子、或言妃主情貌、或列王公名質、咏歌蹈舞、號曰合生。」(『新唐

書」一百十九) 則合生實始于唐、且用諱詞戲謔、或者也就是說諱話。惟至宋當又稍有遷變、今未詳。起今隨今之「合」、「都城紀勝」作「合」、明抄本『說郛』中之『古杭夢游錄』又作起合隨合、何者爲是、亦未詳。

據耐得翁及吳自牧說、是說話之一科的小說、又因內容之不同而分爲三子目。

一、銀字兒 所說者爲煙粉(煙花粉黛)、靈怪(神仙鬼怪)、傳奇(離合悲歡)等。

二、說公案 所說者爲搏刀趕棒(拳勇)、發跡變態(遇合)之事。

三、說鐵騎兒 所說者爲士馬金鼓(戰爭)之事。

惟有小說、是說話中最難的一科、所以說話人「最畏小說、蓋小說者、能講一朝一代故事、頃刻間提破」(『都城紀勝』云。『夢粱錄』同、惟「提破」作「捏合」。)非同講史、易于鋪張。而且又須有「談論古今、如水之流」的口辯。

然而在臨安也不乏講小說的高手、吳自牧所記有譚淡子等六人、周密所記有蔡和等五十二人、其中也有女流、如陳郎娘棗兒、史蕙英。

臨安的文士佛徒多有集會。瓦舍的技藝人也多有、其主意大約是在于磨煉技術的。小說專家所立的社會、名曰雄辯社。(『武林舊事』三)

「小說的歷史的變遷」第四講云、宋建都于汴、民物康阜、游樂之事、因之很多、市井間有種雜劇、這種雜劇中包有所謂「說話」。「說話」分四科。一、講史。二、說經諷經。三、小說。四、合生。「講史」是講歷史上底事情、及名人傳記等、就是後來歷史小說之起源。「說經諷經」、是以俗話演說佛經的。「小說」是簡短的說話。「合生」是先念含混的兩句詩、隨後再念幾句、才能懂得意思、大概是諷刺時人的。這四科後來于小說有關係的、只是「講史」和「小說」。那時操這種職業的人、叫做「說話人」。而且他們也有組織的團體、叫做「雄辯社」。

『武林舊事』卷六諸色伎藝人云

演史 喬萬卷 許貢士 張解元 周八官人 檀溪子 陳進士 陳一飛 陳三官人 林宣教 徐宣教 李郎中 武書生
劉進士 鞏八官人 徐繼先 穆書生 戴書生 王貢士 陸進士 丘幾山 張小娘子 宋小娘子 陳小娘子
說經誦經 長嘯和尚 彭道名法和 陸妙慧女流 余信菴 周大辯和尚 陸妙靜女流 達理和尚 嘯菴 隱秀 混俗 許安
然 有緣和尚 借菴 保菴 戴悅菴 息菴 戴忻菴
小說 蔡和 李公佐 張小四郎 朱脩德壽宮 孫奇德壽宮 任辯御前 施珪御前 葉茂御前 方瑞御前 劉和御前 王辯鐵衣
親兵 盛顯 王琦 陳良輔 王班直洪 翟四郎升 粥張二 許濟 張黑剔 俞住菴 色頭陳彬 秦州張顯 酒李一
郎 喬宜 王四郎明 王十郎國林 王六郎師古 胡十五郎彬 故衣毛三 倉張三 棗兒徐榮 徐保義 汪保義 張拍
張訓 沈佺 沈囑 湖水周 嬾肝朱 掇條張茂 王三教 徐茂象牙孩兒 王主管 翁彥 嵇元 陳可菴 林茂 夏
達 明東 王壽 白思義 史蕙英女流(中略)
說諢話 蠻張四郎
商謎 胡六郎 魏大林 張振 周月巖江西人 蠻明和尚 東吳秀才 陳贊 張月齋 捷機和尚 魏智海 小胡六 馬
定齋 王心齋(中略)
合笙 雙秀才
又卷三社會云、二月八日爲桐川張王生辰、震山行宮朝拜極盛、百戲競集、如緋綠社雜劇齊雲社蹴毬遏雲社唱賺同文社耍詞
角觶社相撲清音社清樂錦標社射弩錦體社花繡英略社使棒雄辯社小說翠錦社行院繪革社影戲淨髮社梳刺律華社吟叫雲機社撮弄、
而七寶・瀟馬二會爲最。(中略)若三月三日殿司眞武會、三月二十八日東嶽生辰社會之盛、大率類此、不暇贅陳。

寫印本『大略』十（接承7所引）云、此種說話雖各運匠心、而仍有底本。夢梁錄影戲條下云、其話本與講史書者頗同、大抵真假相半。又小說講經史條下云、蓋小說者、能講一朝一代故事、頃刻間捏合、與起今隨今相似、各占一事也。小說與講史之外、略可推知、而至今有話本流傳者、亦惟此二科而已。鉛印本は寫印本が『夢梁錄』の「蓋小說者」以下を引くのと同じく、「與起今隨今相似、各占一事也」を小説の説明として引くが、『史略』初版ではそれが「合生」の説明であることが判明したので削除している。また鉛印本は『都城紀勝』云々の記述がない。さらに「立知結局」を「加以牽合」とする。それ以外は『史略』と同じである。

「宋民間之所謂小説及其後來」（接承7所引）云、元人雜劇雖然早經銷歇、但尚有流傳的曲本、來示人以大概的情形。宋人的小説也一樣、也幸而借了「話本」偶有留遺、使現在還可以約略想見當時瓦舍中說話的模樣。

「小説的歷史的變遷」第四講（接承7所引）云、他們也編有一種書、以作說話時之憑依、發揮、這書名叫「話本」。南宋初年、這種話本還流行、到宋亡、而元人入中國時、則雜劇消歇、話本也不進行了。至明朝、雖也還有說話人、——如柳敬亭就是當時很有名的說話人——但已不是宋人底面目。而且他們已不屬於雜劇、也沒有什麼組織了。到現在、我們幾乎已經不能知道宋時的話本究竟怎樣。——幸而現在翻刻了幾種書、可以當作標本看。

王國維「宋槧大唐三藏取經詩話跋」云、今金人院本元人雜劇皆佚、而南宋人所撰話本尚存、豈非人間希有之秘笈乎。近代で「話本」ということを話、物語を記したテキストと理解したのは王國維が始めてであろう。彼は『宋元戲曲史』「宋之小説雜戲」の「傀儡」の項でも『夢梁錄』（卷二十）に「凡傀儡敷衍煙粉靈怪鐵騎公案史書歷代君臣將相故事話本、或講史、或作雜劇、或崖詞云々」というのを引いているところからもそう考えられる。但しこの理解には「話本」は「說話」講談を記録したものであるという意味を認めるのが穩當だろう。それに對して「話本」を文學史的立場

から「説話」の底本ないし台本、つまり説話人の種本だとはっきり定義したのが『史略』である。そうした魯迅の説に對して異議を唱えたのはほかならぬ『史略』の日本語譯者増田渉である。増田氏は「話本」ということばの用例の考察から、底本という意味よりも「説話」のなかみ、つまり話、物語、ストーリーと考えるべきだとした（「話本」ということについて——通説（あるいは定説）への疑問——）『大阪市立大學紀要』一九六六。一方胡士瑩『話本小説概論』（中華書局一九八〇）は増田氏のいろいろな用例をも一部認めつつ、なお「話本」＝「説話の底本」説を執る。胡氏はそうしたことを示す例として次の三件を挙げる。

仁壽清暇、喜閱話本。（『古今小説』序）

才人把筆、編成一本風流話本。（『警世通言』「白娘子永鎮雷峰塔」）

這話本是京師老郎流傳。（『古今小説』「史弘肇龍虎君臣會」）（前掲書上冊一五九頁）

しかしこれらはいずれも明代の資料であり、殊にこれらの例を「説話の底本」とするのは再吟味を要するだろう。これらの「話本」を講談の記録と考えても何の不都合もない。第二の例にしたところで、實際の語りの上での技巧的表現であるかもしれない、どれだけ宋代の事實を傳えているかは分らない。確かに宋代には説話が盛行し、舊來の口誦藝能の範圍には納まらなくなつて、聴衆も説話人も新しい故事を要求するようになる。そして書會というものができ、そこに屬する書會先生や才人と言われる一定の文化的水準を持った人々が説話人たちのために次々と新しい物語、話を作りあげた。だから説話の底本がなかったわけでは決してない。現に、これは『史略』にかなり遅れて一九四〇年東京の文求堂が影印して世に知られた『醉翁談錄』には説話の底本と考えられるものの存在が示されている。しかし「底本」がそのまま「話本」であるという證據はないのである。宋代に於ける口技の藝能人の技術の傳承については

それほど明らかではないが、一般的に考えても多くは師弟の間の傳授によって繼承されたであろうし、かれらがみな文字を讀め、その讀解力によって多くの故事を自己のものにしていったとは考えにくい。書會の人たちが作った底本が説話人の誰れもが利用できたわけではなからう。またいまに残る話本として取りあげられている二種のうち『京本通俗小説』はしばらく措くとして、『五代史平話』はその刊本が宋元間のものと考えられている。まず刊刻されるということ自體不特定多數の讀者を前提として讀物として商品化されると考えてよいであらう。説話人の底本としてなら刊刻など不要である。以上のような條件を考えに入れるならば、「話本」は説話の底本とするよりも、むしろ最初は多く、話、物語、故事、ストーリーそのものとして使われ、やがて書物の印刷が格段に發達し大規模になった明代になって説話を記録したものとして理解されるようになったのではないか。「話本」ということばは確固として指す内容があり、すでに定着しているので改める必要はないが、それを必ずしも説話の底本と考えることはない。増田氏の異議はまだ十分存在の意義を失つてはいないと思う。

9 『新編五代史平話』者、以至而雜以誕妄之因果說

二三十四

寫印本『大略』十云、甲 講史／新編五代（梁唐晉漢周）史平話者、講史之一、蓋即孟元老（老）所謂說五代史之話本。其書每代二卷、各以詩起、次入正文。惟梁史平話始于開闢、次略叙歷代之事、以至黃巢變亂朱氏立國、惜今亡其下卷。鉛印本『大略』は『史略』に同じ。

「小説的歴史的變遷」第四講（接承。所引）云、一種是『五代史平話』、是可以作講史看的。講史的體例、大概是從開天闢地講起、一直到了要講的朝代。『五代史平話』也是如此。它的文章、是各以詩起、次入正文、又以詩結、總是一段一段的有詩爲證。但其病在于虛事鋪排多、而于史事發揮少。至于詩、我以爲大約是受了唐人底影響。因爲唐時很重詩、

能詩者就是清品。而說話人想仰攀他們、所以話本中每多詩詞、而且一直到現在許多人所做的小説中也還沒有改。再若後來歷史小説中每回的結尾上、綵有「不知後事如何？且聽下回分解」的話、我以爲大概也起于說話人、因爲說話必希望人們下次再來聽、所以必得用一個驚心動魄的未了事拉住他們。至于現在的章回小説還來模仿它、那可只是一個遺迹罷了、正如我們腹中的盲腸一樣、毫無用處。「宋民間之所謂小説及其後來」は「所謂小説」について述べているので「講史」である『五代史平話』には論及しない。

狩野直喜「支那俗文學史研究の材料」云、五代平話は五代史の演義で、これは後世に盛んに出來て居る演義類の鼻祖といつてもよろしい。私が前に擧げた宋の說話のうち専ら史書を講ずる伎藝人があつたが、此書は或はこれらの講談を録したものであるまいかと思ふ。五代史の演義には、後世に明人羅貫中の作といはれて居る殘唐五代史演義傳といふものがある。恐らく此れに本づいて作つたものではあるまいか。此書に就いて猶論じたいこと多けれども、紙數に限りあれば一切之を略する。要するに私が言はんと欲する所は支那の俗文學は元明清三代に戲曲とか小説とか澤山出來て居るけれども、其實唐末五代に已に萌芽を發し、宋に至りて漸く流行したものが元に至りて一段の進歩をなしたものである、私の前に擧げた鈔本若しくは刻本は其臆說に證據を供するものと信するのである。（大正五年三月、藝文第七年第三號）『五代史平話』の刊行時期については『京本通俗小説』の項、本篇13の引用文を参照。

曹元忠『五代史平話』跋」云、宋巾箱本『五代史平話』、于梁唐晉漢周各分上下二卷。惜梁史漢史皆缺下卷、雖上卷尚存回目、而梁史已翦去數葉不能補矣。元忠于光緒辛丑游杭、得自常熟張大令敦伯家、以壓歸裝。顧各家書目皆未著錄。傳訪通人、亦驚以爲罕見秘籍。偶憶『夢梁錄』小説講經史門有云、講史者、謂講說『通鑑』漢唐歷代書史文傳興廢爭戰之事。有戴書生、周進士、張小娘子、宋小娘子、邱機山、徐宣教。疑此平話或出南渡小説家所爲、而書賈刻之、

故目錄及每卷首尾輒大書「新編五代某史平話」也。惟刊自坊肆、每于宋諱不能盡避。其稱魏徵及貞觀處、則作皆「魏証」「正觀」、要亦當時習慣使然。是書近爲吾友武進董大理授經景刊行世、寫刻之精、無異宋槧。他日藏書家或與士禮居本『宣和遺事』并傳乎。宣統辛亥七月、吳曹元忠跋于京邸之凌波榭。董氏誦芬室影印本

近刊の『新編五代史平話』はすべて董氏影印本がもたっており、古典文學出版社本（一九四〇）、中華書局本（一九五〇）、上海古籍出版社『宋元平話集』上册（一九〇）などがある。

10 所引『梁史平話』

二三八

寫印本『大略』は最初の詩を引かず、「奪却中原四百州」の詩までを引用する。鉛印本『大略』は『史略』と同じである。「共着炎帝」の「着」字、「二百四十二年」の「二」字、「天下亂臣賊子」の「天下」二字を脱する。これはすべてのテキストに共通する。

『師弟答問集』二六頁云、「増田問云」140頁 五代史平話の引用文 黄巢兄弟四人過了這座高嶺、望見那侯家莊。好座莊、舍一農家？〇一別莊？（魯迅答云）侯家莊ハ村ノ名デ、莊舎トハ實ニ全村ノ家屋ヲ指スノデス。

11 于是更自晉及唐、以至即其例也

二四十六

寫印本『大略』十（接承10所引）云、其後叙說繁簡不同。大抵一涉瑣事、反多增飾、狀以駢儷、證以詩歌。今舉一端、以見大槩。書叙黄巢下第、與朱溫等爲盜、將劫侯家莊馬譜〔評〕事時途中情景去（二云）。鉛印本『大略』は『史略』に同じ。

12 所引『梁史平話』二

二四十二

寫印本『大略』は「行過一個高嶺」から引用する。「頭相軋」の「頭」を「鼓」に作り、「黄巢兄弟四人」を「黄巢四個兄弟」に作る。また「望見那侯家莊」から「那四個兄弟」までを略す。さらに「同人」の上に「且」字がある。

そして「那馬家門首」の「那」字を脱す。鉛印本は『史略』に同じ。いま誦芬室影印本を以て校するに、詩句の「擲到底」の「底」を「地」とし、「黃巢兄弟四人」を「黃巢四個弟兄」に作り、「且」も「那」もともに存在する。これらは引用に際しての誤寫であろう。魯迅が誦芬室景印本以外のテキストを見た可能性は非常に少ないからである。近刊には『宋元平話集』上冊（一九〇・上海古籍出版社）に誦芬室本に據って収録するものがある。

13 『京本通俗小説』、以至則輒舉春詞至十餘首

一一四一二

寫印本『大略』十云、乙 小説／書（京）本通俗小説不知幾卷、今存卷十至十六。每卷一篇、各爲起訖、與吳自牧所云各占一篇者相合。其目爲碾玉觀音菩薩蠻西山一窟鬼志誠張主管拗相公錯斬崔寧馮玉梅團圓等。取材多在近時、或採之他種説部。體裁必先以閑話或他事、久乃轉入正文。如碾玉觀音因敘延安郡王遊春、而先以詩詞十餘首、中有云、「鉛印本『大略』は「頃刻可了」四字無く、「與吳自牧所云「各占一事」者正同」と寫印本に同じくするが、これは初版で正された。また「後乃綴合」を「久乃牽合」に作る。その他は「史略」に同じ。

「宋民間之所謂小説及其後來」全集一「墳」（接承。所引）二云、其話本曰『京本通俗小説』、全書不知凡幾卷、現在所見の只有殘本、經江陰繆氏影刻、是卷十至十六的七卷、先曾單行、後來就收在『煙畫東堂小品』之内了。還有一卷是叙金海陵王的穢行的、或者因爲文筆過于碍眼了罷、繆氏沒有刻、然而仍有卮園的改換名目的排印本。卮園是長沙葉德輝的園名。

刻本七卷中所收小説的篇目以及故事發生的年代如下列。

卷十 碾玉觀音 紹興年間。

十一 菩薩蠻 大宋高宗紹興年間。

十二 西山一窟鬼 紹興十年間。

十三 志誠張主管 無年代，但云東京汴州開封事。

十四 拗相公 先朝。

十五 錯斬崔寧 高宗時。

十六 馮玉梅團圓 建炎四年。

每題俱是一全篇，自爲起訖，并不相聯貫。錢曾『也是園書目』(十)著錄的『宋人詞話』十六種中，有「錯斬崔寧」與「馮玉梅團圓」兩種，可知舊刻又有單篇本，而『通俗小說』即是若干單篇本的結集，并非一手所成。至于所說故事發生的時代，則多在南宋之初，北宋已少，何況漢唐。又可知小說取材，須在近時。因爲演說古事，範圍即屬講史，雖說小說家亦復『談論古今，如水之流』，但其談古當是引證及裝點，而非小說的本文。如「拗相公」開首雖說王莽，但主意却在引出王安石，即其例。

「小說的歷史的變遷」(四(承接)所引)云，一種是『京本通俗小說』，已經不全了，還存十多篇。在『說話』中之所謂小說，并不像現在所謂的廣義的小說，乃是講的很短，而且多用時事的。起首先說一個冒頭，或用詩詞，或仍用故事，名叫「得勝頭回」——「頭回」是前回之意。「得勝」是吉利語。——以後才入本文，但也并不冗長，長短和冒頭差不多，在短時間內就完結。可見宋代說話中的所謂小說，即是「短篇小說」的意思，『京本通俗小說』雖不全，却足夠可以看見那類小說底大概了。

『京本通俗小說』江東老蠅跋」云，宋人平話即章回小說。『夢梁錄』云，說話有四家，以小說家爲最。此事盛行於南北宋，特藏書家不甚重之，坊賈又改頭換面，輕易名目，遂致傳本寥寥天壤。前只士禮居重刻宣和遺事，近則曹君直

重刻五代史平話爲天壤不易見之書。余避難滬上、素居無俚、聞親串粧奩中有舊鈔本書、類乎平話。假而得之雜度、於『天雨花』『鳳雙飛』之中、搜得四冊、破爛磨滅、的是影元人寫本。首行「京本通俗小說第幾卷」、通體皆咸筆小寫、閱之令人失笑。三冊尚有錢遵王圖書、蓋卽也是園中物。「錯斬崔寧」「馮玉梅團圓」二回見於書目、而「宋人詞話」標題「詞」字、乃「評」字之訛耳。所引詩詞皆出宋人、雅韻欲流。并有可考者、如「碾玉觀音」一段、三鎮節度延安郡王指韓斬王、秦州雄武軍劉兩府是劉錡、楊和王是楊沂中、官銜均不錯。尚有「定州三怪」一回、破碎太甚、「金主亮荒淫」兩卷過于穢褻、未敢傳摹。與也是園有合有不合、亦不知其故。歲在旃蒙單閼、江東老蟬跋。單刻本。

『京本通俗小說』は民國四年（一九一五）江東老蟬、つまり繆荃孫によって發見され、『影元人寫京本通俗小說』と題して翻刻された。卷十から卷十六までの殘卷の寫本であるというが、その後、原本の行方が不明であること、一九二六年の鹽谷溫博士の『三言』の發見によって、七篇のうち六篇が『警世通言』に、殘る一篇が、これは早に知られていたが『醒世恒言』に收めるものとはほとんど同じであるということが分ったこと、「馮玉梅團圓」の初めに見える詩が明人瞿佑の作であること、書名の「〇〇小説」といいう言いは明代になって多くなることなどの理由から、書そのものの眞僞が疑問視され、いまでは僞作説も有力である。（馬幼恒「京本通俗小説各篇的年代及其眞僞問題」『中國小説史集稿』民國元・時報出版公司。Andre Lévy「Le problème de la date et de l'authenticité du recueil de contes intitulé "King-pen t'ong-sou siao-chouo"」1974, "Mélanges de Chinologie offerts à M. Paul Demiéville." vol. II. 中國語訳「京本通俗小説眞僞考」『中國古典小説研究專集』一・民國六六・靜宜文理學院中國古典研究中心編など）「京本」というのは「都の出版物」という意味で、地方で出版されるにもかかわらず、テキストに箔をつけるためのことばで、一般に物の分らない讀者を釣ろうとしたのである。「京本」というからにはかつて一度は刊刻されたことがあ

て、原本にあたるのはその刊本を承けた寫本ということになるが、そのあたりの事實に關しては一切不明である。ただかりに僞作だとしても、僞作の時間的な下限は中國において『三言』がまだ佚亡しない以前の作ということになる。そして『京本通俗小説』に收める各篇は大體に於て宋代の小説の特徴と符合するから、改編は免かれぬものの、宋代小説の形態をよく保っていると言えよう。『魯迅藏書目錄』は民國九年江陰繆氏刻本二冊を著録する。これは「煙畫東堂小品」本である。テキストには上記の二種のほか、黎烈文標點商務印書館本（民國十四・三）、古典文學出版社排印本（一九五〇）中華書局排印本（一九五九）上海古籍出版社排印本（一九六〇）などがある。

狩野直喜「支那俗文學史研究の材料」云、近頃支那で刻された二種の小説がある。一は京本通俗小説、といひ一は五代平話といふ。共に宋板覆刻といふ人もあるやうだが、其板式より考へても寧元槧ではあるまいかと思ふ。否京本通俗小説に就いては宋板でない證據がある。即ち書中に收めたる拗相公は王安石のことを述べたものだが、其中に「如公說先朝一箇宰相。他在下位之時。也着實有名有譽的。」云々といつて居る。已に安石を先朝の人とすれば、元人から言を立てたもので其宋板でない事は明かである。所で又た怪しむべきは、錯斬崔寧のうちに「我朝元豐年間。有二個少年學子。姓魏名鵬舉。字冲霄。」云々とある。元豐を我朝とすれば、かくいふものは宋人でなくてはならぬ。錢運王の也是園書目に宋人詞話の目を立て、其中に錯斬崔寧と又此書に收むる馮玉梅團圓とを載せて居るから、或は遵王の架上には宋板のものがあつたかも知れぬが、とも角、此書に輯むるものは此書の出版こそ元時代なれ、別に同一の話を記したものが已に宋時にあつて、元人が此書中に採入るとき文字を改めなかつたから、我朝などいふ文句が其儘残つたものであらう。これによつても、小説書が已に宋代にあつたといふ想像は確につくのである。露國の陸軍大佐コツロフ氏が先年西夏黑水城の故址から發見し今ペトログラードのアレキサンデル三世博物館に陳列されて居る、

南宋古畫のうち、支那史上有名な美人をかけた浮世繪風の板畫がある。宋代に俗文學が盛んに行はれた事實と併せ考ふるときは頗る興味を感ずるのである。

この京本通俗小説に載せてある話の内容は誠につまらぬが、これにつき興味を感ずるは、第一小説といふ種類のあつた事は前に引いた諸書に見えて居るが何々小説と書に名をつけたものは、現存の小説書類で、これが最古いものと思はる。又第二には此書中輯る所、多くの獨立した物語で、最初に詩若しくは詩餘を掲げそれから這詩云々とか此詩説云々と其講釋が一渡りあつて、それから話説云々といつて本題の話に入るものもあり、又本題に入る前に此に類似した一口噺を挿んだものもある。それは後世に出來た醒世恒言、拍案驚奇、今古奇觀等と全く體裁を一にして居る。

即ち後世の此種の小説は元代(若しくは宋代)より別に體裁に於て變化がない事が分る。第三には此書輯むる所の話のうち、にそれが又後世の小説に其儘取られて居る事で、即ち前に擧げた錯斬崔寧の如き其一例である。これは一人の戲言により、多くの人命を害するに至つたといふ教訓的の物語であるが、それと全く同一の物語が、醒世恒言卷三十三卷に十五貫戲言成巧禍といふ標題で載つて居る。唯我朝元豐年間とあるのが故宋朝中と改まつて居る丈で、其他は全部に文句の異同がない。又此書のうちに前に述べた通り拗相公と題する一篇、即ち王安石が罪を得て金陵に謫せられし途すがら、其政治よからずして人民の恨を深くした所から、到る處の旅館から拒絶され、大に窘んだ事を面白くかいたものであるが、これも後世の小説に入つて居る。王漁洋の香祖筆記(十卷)に

又如警世通言。有拗相公一篇。述王安石罷相歸金陵事。極快人意。及因盧多遜謫嶺南事。而稍附益之耳。

とあつて漁洋は警世通言に始めてかいた様に思つて居るけれども、安ぞ知らん此書にあるものを通言に轉載したに過

ぎないのである。

14 所引「碾玉觀音」

二五十六

寫印本『大略』は最初の「鷓鴣天」の詞および説明を引かず、「這三首詞」から引用を始め、秦少游の詩も引かない。他は『説略』に同じく、鉛印本『大略』また『史略』に同じ。秦少游の詩「飄颻澹蕩」の「颻澹」二字を新版全集のみ音意通ずるによつて「揚淡」に作るが、舊に復した方がよい。また「鷓鴣天」の「煖洪回雁起平沙」は、三版より五七年版全集まで誤つて「回」で句讀を切るが、新版全集で合訂二版の舊に戻された。なお單刻本は王岩叟の詩「怨風怨雨兩俱非」の「兩」字を「雨」に誤る。

『師弟答問集』二六頁云、(増田問云)14頁 西山一窟鬼の引用文……又是嗶、嗶大官府第出身、ドエライ(?) 何故ソナ意味ニナリマスカ? 文字ノ意義ナキ俗語デスカ? (魯迅答云)俗語デスカラ其ノ語源ヲ云ヘナイ。

15 此種引首、以至如其記訂婚之始云

二六十二

寫印本『大略』十(接承14所引)云、此種引首、詩詞而外、亦用相類之事、名曰得勝頭廻。所以術示多識、延引時間、與講史之先敘開闢天地略異。以類事起者、亦取時事、而較有淺深、殆即吳自牧所謂起今隨今者也。至于文體、與五代史平話之鋪敘瑣事處頗相似、然較詳。其西山一窟鬼敘吳秀才訂婚云、「鉛印本『大略』は「故敘述方始」以下五句を「孟元老之所謂《合生》、吳自牧之所謂《起今隨今》(或作起今隨合、殆亦類此者也)に作る他は、すべて『史略』に同じ。

「宋民間之所謂小説及其後來」全集一「墳」(接承13所引)云、七篇中開首即入正文者只有「菩薩蠻」、其餘六篇則當講說之前、俱先引詩詞或別的事實、就是「先引下一個故事來、權做個『得勝頭回』」(本書十五)「頭回」當即冒頭的一回之意、「得勝」是吉語、瓦舍爲軍民所聚、自然也不免以利市語說之、未必因爲進御才如此。

「得勝頭回」略有定法、可說者凡四。

一、以略相關涉の詩詞引起本文。如卷十用「春詞」十一首引起延安郡王游春、卷十二用士人沈文述の詞逐句解釋、引起遇鬼の士人皆是。

二、以相類之事引起本文。如卷十四以王莽引起王安石是。

三、以較遜之事引起本文。如卷十五以魏生因戲言落職、引起劉貴因戲言遇大禍、卷十六以「交互姻緣」轉入

「雙鏡重圓」而「有關風化、到還勝似幾倍」皆是。

四、以相反之事引起本文。如卷十三以王處厚照像見白髮の詞有知足之意、引起不伏老の張士廉以晚年娶妻破家是。

而這四種定法、也就牢籠了後來的許多擬作了。

「小説的歷史的變遷」四見13。

「得勝頭回」に關する『史略』の説は明らかに郎瑛『七修類稿』卷二十二の説（本篇3の狩野文に見える）に對するものである。他に胡適「宋人話本八種序」（『胡適文存』第三集卷六）に講釋の前座に人集めの太鼓を打ち笛を吹く、その樂曲の調子を「得勝令」と言つたことから附いた名だとし、王古魯の『一刻拍案驚奇』附録三「話本の性質和體裁」（一九三〇・古典文學出版社）もその説を執るが、胡士瑩『話本小説概論』（一九〇〇・中華書局）は、それでは「笑耍頭回」（まずはお笑の種と致しまする）の例など説明できないとして、魯迅の説を妥當としてゐる。なお胡士瑩の書では「得勝頭回」の部分をも更に細かく分けて、「篇首」（詩詞）、「入話」（詩詞の解釋）、「頭回」の三部分とする。

寫印本『大略』の引用は、箇所は同じだがそれ以後のテキストに此べて引用分量が少ない。「吳教授相揖罷」以下「在錢塘門里浴城住」までが省略され、また「二千貫錢房計」以下を引かない。鉛印本は『史略』に同じである。なお「西山一窟鬼」は『警世通言』では卷十四「一窟鬼癩道人除怪」にあたり、引用文は『警世通言』によって正された形跡が認められる。『京本通俗小説』單刻本、寫印本『大略』は、「有一年之上」の句頭に「也」字が、「頗有些趑足」の「有」字の上に「自」字がそれぞれあるが、鉛印本『大略』で脱して以後補われない。また「原來」も單刻本、寫印本『大略』では「元來」に作るが、鉛印本より「原來」となる。「青春」は單刻本では「青年」に作る。『警世通言』では「青春」に作る。「犬馬之年」の「犬」字は單刻本より初版までが「夫」字に作り、合訂二版で「犬」字に正された。『警世通言』も「犬」に作る。「房計」は單刻本、『警世通言』ともに「房臥」に作る。「房計」も「房臥」も意味にそれほど違はないが、鉛印本『大略』で引用を補った時から「房計」に作る。魯魚の誤りかどうかは未詳。「又好人才」の「才」字は單刻本はもとより『史略』訂正版まで「材」字に作り、第十一版で「才」字となる。

17 南宋亡、以至遂俱以「小説」爲通名

二七五

寫印本『大略』十（接承16所引）云、南宋亡、雜劇消歇、說話遂不復行、然話本蓋頗有存者、後人目染、仿以爲書、雖已非口談、而猶存曩體。講史者流有東周列國兩漢三國演義等、小說者流有今古奇觀龍圖公案等、而世間不復嚴別、第以小説爲其名。鉛印本は『醉世石』の替りに『今古奇觀』とする他は『史略』に同じ。

「小説的歷史的變遷」四二云、總之、宋人之「說話」的影響是非常之大、後來的小説、十分之九是本于話本的。如一、後之小説如『今古奇觀』等片段的敘述、即仿宋之「小説」。二、後之章回小説如『三國志演義』等長篇的敘述、皆本

于「講史」。其中講史之影響更大，并且從明清到現在，『二十四史』都演完了。

なお『史略』の記述と直接對應するわけではないが、魯迅の話本に對する総括とも言うべき文章を次に引いておく。

「宋民間之所謂小説及其後來」全集二『墳』（接承15所引）二云、在日本還傳有中國舊刻的『大唐三藏取經記』三卷、共十七章、章必有詩。別一小本則題曰『大唐三藏取經詩話』。『也是園書目』將「錯斬崔寧」及「馮玉梅團圓」歸入「宋人詞話」門、或者此類話本、有時亦稱詞話、就是小説的別名。『通俗小説』每篇引用詩詞之多、實遠過于講史（『五代史平話』、『三國志傳』、『水滸傳』等）、開篇引首、中間鋪叙與證明、臨末斷結咏嘆、無不徵引詩詞、似乎此舉也就是小説的一樣必要條件。引詩爲證、在中國本是起源很古的、漢韓嬰的『詩外傳』、劉向的『列女傳』、皆早經引『詩』以證雜說及故事、但未必與宋小説直接相關。只是「借古語以爲重」的精神、則雖說漢之與宋、學士之與市人、時候學問、皆極相違、而實有一致的處所。唐人小説中也多半有詩、即使妖魔鬼怪、也每能互相酬和、或者做幾句即興詩、此等風雅舉動、則與宋市人小説不無關涉、但因爲宋小説多是市井間事、人物少有物魅及詩人、于是自不得不由吟咏而變爲引證、使事狀雖殊、而詩氣不脫、吳自牧記講史高手、爲「講得字真不俗、記問淵源甚廣」（『夢粱錄』二十）、即可移來解釋小説之所以多用詩詞的緣故的。

由上文推斷、則宋市人小説的必要條件大約有三。

一、須講近世事。

二、什九須有「得勝頭回」。

三、須引證詩詞。